



ピッポ新聞

2011

2

No.256

子どもの本専門店 ピッポ

ピッポ古書クラブ

〒424-0886

静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX

054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

登山靴 と一冊の絵本

先月号の「編集後記」でハケ岳登山の途中でプラスチックの登山靴が壊れてしまったことを書きましたが、今月はこの靴のことからはじめません。

その壊れ方は、ガラスが割れたときのようにでした。だれもが割れたガラスの修理など考えられないように、ぼくもその状態を見て修理はあきらめ、廃棄することしか思いつきませんでした。4万5千円もした靴を、7年(?)で捨てなければならぬとはどうにも納得できません。この靴は2足目です。

前の靴は壊れたわけではなかったのですが、あの程度の年月使用したので壊れる前にと、なんとなく2足目を買ったのです。前の靴が使用不可能になってから、新しいのを履いていたら、こちらばかりを使い、前のは、ほつたらかしてしまっただけです。こういうプラスチック製のもの、当然、使うことで劣化ははやまるのでしようが、使わなくても、ある程度年月が経てば劣化してしまうのでしょうか？

このプラスチックブーツの一番の利点は、手入れが楽だということです。この靴はアウトターとインナーにわかれているのですが、使った後、

インナーを出して陰干ししておくだけです。アウトターの汚れが目立つ場合は、水洗いすればいいのです。この点は紛れもなく「便利」です。それと、靴の前後に突起のようなものがあって、ここにアイゼン(これもワンタッチのものが売られている)をひっかけて、かかとを締めれば簡単にアイゼンを装着できるのですが、登る途中でアイゼンを装着するのに面倒がなく、「便利」です。スキー靴なども今やプラスチックが主流のようです。

材質の点など難しいことはあるのですが、作る側だって金型さえあれば大量生産は簡単なことで、都合がよいのではないのでしょうか。それにしても、値段が高い！

ぼくは主に無雪期に履いている皮の登山靴も持っていますが、こちらは25年ほど経ちますが、まだ使用しています。プラスチックブーツとは反対に、使用後に油を塗り込んだりする手間が多少掛かります。しかし、傷めば修理も可能です。ぼくもこれまで2度修理しました。作る側も、手縫いなどもあり、手間がかかり、大量生産はできません。値段も少し高目です。

プラスチックの靴は、靴に足を合わせるという感じですが、こちらは足に靴を合わせることでできます。足だって、それぞれ個性があるので、その個性に合ったものを選ぶのが自然なことですね。理想は自分の足に合わせてオーダーメイドすることですが、まあ、そこまではね。

このプラスチックの登山靴の最大の欠点は、あの程度の時が経てば壊れるということです。

そりゃ作られたものが壊れるのは、もの道理ですが、それにしても少し早くはな
いか。

それに、ぼくの場合がそうであったように、予兆など全然なく、突然壊れたのです。朝、山小屋で靴を履いたときにはなんでもなかったものが、次の山小屋について靴を脱いだら、かかとの部分がボロボロ剥がれたのです。

靴下や手袋などは予備を用意しますが、だれもあの重くてガサ張る登山靴を2足用意して山に入る人はいないでしょう。そのことが、冬山では場合によっては致命的になることだってあるのです。メーカーはこういうことをどのようになっているのかな？

おっと、いけない、いけない、今回はメーカーを追求するために書きだしたのではありませんか。あくまでも自己反省のために書いていたのです。

気付けば、回りは 理不尽な「物」ばかり

今回登山靴が壊れたことを切っ掛けに、ふと、自分の回りを見渡してみると、まわりにはわけのわからない「物」や、納得がいかない「物」があふれていませんか？
ぼくは今度のことで、それに気付いてしまったのです。「なにさ。いまさら」って、言われてしまいそうです。

たえばカメラだ。
今やカメラの主流はデジカメです。ぼく

もデジカメを使っています。「記憶素子」というのですか、あのフィルムの役割をするもの。あれが壊れてしまったのです。もう一枚あるのですが、仕事で使う画像が入っているため、山に持っていく分けにいかず、もう一枚買うことにして、カメラ屋に行つたのです。ところが、いとも簡単に「それは今は製造中止で、手に入りません」といわれてしまいました。諦めきれなくて量販店にもいつてみたのですが、答えは同じでした。

ということとは、もう一枚が壊れたり、なくしたりしたら、カメラ自体が無用の長物になってしまふということ。たかだか8年ぐらいに必要な部品が入手できなくなるとは、メーカーの製造責任はどうなっているのだろ？

次からつぎに新機種は作り続けられていくというのに、売り出して一定年月過ぎれば後は知らないよというわけです。

「きみ、なにを言っているんだ！古いのなんて持つて持っている方がおかしいよ。いまやこんなに安いデジカメがいつぱいでいるのだから、新しいのを買いなさいよ」ということで、あたかも古いのを使い続けるのは悪だといわんばかりです。なんと理不尽なことでしょう。

理不尽といえば、プリンターというのも、理不尽とおもいませんか？ぼくの使っているプリンターはエプソンのもので価格は1万5千円ぐらいだったと思います。安い（？）ですよ。ところが、これに使用するインク（ぼくの使っているのは6色）

が1回買ったたびに6千円以上するのです。

ネットでの古書の注文は、必ずプリントアウトとしますから、インクの消費量もばかになりません。インクの交換の度に6千円ちよつと掛かります。インク2回の交換で新しいプリンターが買ってしまうのです。

もっと「理不尽」なことには、機種によって、インクが指定されているのです。同じメーカーのプリンターでも互換性がありません。ユーザーは、一度買ったプリンターに合った（指定された）インクを使い続けるしかないのです。しかも、このインクの安売りなど一度もお目に掛かったことなどありません。

メーカーは一度自分の所のプリンターを売ってしまったら、あとはインクで儲けるだけというわけです。これを「理不尽」といわずして、なんとといえばよのしょう。だいた一色千円以上するなど、べらぼうすぎるのではなか！

こんなことはプリンターに限ったことではありません。家で使っている電話兼ファクシミリだってそうです。ついつい「どんな紙にでもプリントできるファクシミリ」といううたい文句に釣られて買えば、これも専用のインクフィルムしか使えず、しかもすぐ無くなって（長さ15メートル）しまします。これまた値段がべらぼうに高いと書いています。

いまや家電製品はもとより、身の回りを見ればこのような「物」であふれかえっています。

怖いと思うのは、これらの「物」は結果

だけ与えられ、「便利」という名のもとに、使い方だけ教えられるということ)その「物」の成り立ちなどは全然見えないし、理解できないことです。わたしたちはいつから自分の回りにこんな「物」を受け入れて、あふれさせてしまったのでしょうか。

「衣を剥がせば、これって「催眠商法」ではないか？」

ここまで書いてきたら、またまた気付いてしまった。

少し前、世の中をにぎわした「催眠商法」といのがありました。覚えていますか。老人や主婦などを集め、集まったひとたちの目の前で安いものを無料でポンポンくれて、気付くともう必要でない高価な物を買わされているという、あの商法です。

この「催眠商法」のからくりの視点から、最近の世の中を眺めると、なにか見えてきませんか。

プリンター、デジカメ、ファクシミリ、携帯電話、その他諸々の家電など、安い「物」を「便利」(だけどよく考えると、その「物」は、生活していくのに、たいして必要でないことが多い)だと思つて買うと、機械を動かすのに絶対必要な消耗品がべらぼうに高く、しかもそれを買ひ続けなければならぬ仕組み。

ね、「催眠商法」にそっくりでしょう。もっと範囲を拡げて見ると、いくらでも見えてきますよ。去年まであった新車を買つと政府が補助

金だしてくれ、さらにエコ減税してくれるというあれなどは、その最たるものではないかしら。

補助金というあめ玉を目の前に見せられた民衆は、まだ買い換える必要がないのに新車購入をしてしまいました。

やはり、エコポイントという人參をぶら下げられた人びとは、まだ使える洗濯機や冷蔵庫の買い替えを急ぐ、あるいはたいして必要でない「物」を買わされてしまつた。これって、やっぱり「催眠商法」そのものでしょう。

「催眠商法」をやった人は、場合によっては詐欺罪で罰せられるのに、時の権力者である政府や、お先棒を担いで喧伝するメディアがいつしよになつてやれば、誰も騙されたと思わないし、罰せられることもありません。

問題は、ここなのです。個人が殺人を犯せば絶対罰せられる(当たり前ですが)のに、国(権力者)が起す戦争で多くの人を殺しても、特に戦勝国は罰せられることはありません。「理不尽」ではありませんか。

やっぱり、起承転結が目に見える方がいいな

先程も書きましたが、「便利」という名のもとに、結果だけ(使い方)を与えられて、そのものの成り立ちや、内容(中味)がわたしたちには、全然分からないというのが今の世の中なのです。これは、登山を

するのに、地形図や磁石を持たずに山に入つて行くのと同じことではありませんか。

もしそのことで遭難した場合、登山者が非難されるのは当然のことです。しかしながら、今、わたしたちの日常は、地形図や磁石を持たないで生活しているのと同じだと言えるではありませんか。

これでは、どこか一つ壊れたり、狂つたりしたら、手も足も出ないということになりかねません。

ずーと以前、ぼくは仕事で軽四(マツダのポーター)を使つていました。ある時窓を開閉するハンドルが折れてしまったのです。そこでペンチを車の中に入れておいて、必要な度にペンチで折れた部分を挟んで回して窓の開閉をしておきました。

ある時、トラヤ帽子店(音楽のバンド)の中川ひろたか氏(今は絵本作家といふのかな?)をこの車に乗せて走っているとき、ペンチで挟んで窓を開けたら、これを見た中川さんに「なんとピッポさんらしいですね」といつてお笑いされたことがあります。

いえ、ぼくは大笑いされたことを、ここに書きたいのではありません。乗っていた軽四の窓のハンドルが折れたので、一時しのぎにペンチを使つていたことこそを書きたいのです。

ペンチを使う(それが適当かどうかなどは問題外です。もつぱらセンスの問題ではありませんが)ことができたという事は、ぼくにはなぜ窓があかないかという原因が分かつていたということです。ハンドルを回

せば窓は開け閉めできるのですが、そのハンドルが折れたためハンドルが動かない。だから、そのハンドルを動かすためペンを使ったのです。

この起承転結は、誰の目(おそらくは小学生)にも理解できます。もしこれが、今の主流を占める「パワーウィンド」だったら、専門家の元を持っていく以外、ぼくには手も足も出なかったことでしょう。

たしかに「パワーウィンド」は便利ではありませんがね……。

一冊の絵本の世界が なんと新鮮なことか!

さて、だいぶ横道にそれてしまいました



喜びも奪われてしまったように思えてなり

が、わたしたちは「便利」というキーワードのもとに、他人(権力や資本)にあまりにも多くのことを委ねてしまったようです。その結果、人間としての多くの基本的な行為や

ません。

ここに『にぐるまひいて』(ドナルド・ホール・文、バーバラ・クーニー・絵、もきかずこ・訳、ほるぷ出版、1470円)という絵本があります。

この絵本はアメリカの古き良き時代のある家族の一年の暮らしを描いたものです。

秋、父さんは、家族が1年かけて育てた作りつたさまざまなものを荷車に積み込みます。遠く離れたポーツマス市場に売りに行くのです。10日かけてようやく着いた父さんは、もっていった物を次々に売り、最後は積んでいった荷車や荷車を引かせた牛や手綱まで売ってしまいました。そこで手にしたお金で、父さんは必要な物を買って家に戻りました。

迎えた冬、息子はほうきを、母さんはヒツジの毛で糸を紡ぎ、娘は刺繍をし、父さんは新しい荷車を作り始めました。家族はまた、豊かな自然の中で一年の素朴だけれど、地に足がついた暮らしをはじめます。

この絵本からは、家族の人間としての生きる喜びや自信というものが伝わってきます。彼らの生活は、たかさんの「便利な物」には囲まれていないけれど、その生活は「なんと新鮮なもの」として、ぼくには写るのです。

今や、私たちの生活は、起承転結の「結」

の部分だけをつなぎ合わせたものと言い換えることができるように思えます。

思えば遠くへ来たもんだ……。」

とは海援隊の武田鉄矢の歌のフレーズですが、この歌詞のように、わたしたちは知らない間に随分遠くまで来てしまったようです。もう後戻りできない程遠くへ来てしまったのかも知れません。

過ぎし時間をもどすことはできませんが、「結」だけから、せめて起承転結が見える視点だけは失いたくないものです。

編集後記

3月6日の日曜日駿府マラソンの10キロに出場します。といっても

この大会のために練習はしていません。週に一回1時間前後山道を走っているだけです。この大会のために唯一準備をしたことは、新しいジョギングシューズを買ったことです。これまでのものは両方の親指のところに穴が開いてしまったからです。見るに堪えかねたカミさんがちょっと早い誕生日プレゼントと買ってくれたのです。今年フルマラソンを走るという大それた目標を密かに立てました。走る大会も決めています。今年から始まる十月三十日の大阪マラソンです。抽選で出場の有無が決まるので、できるか分かりません。もし当たったら、買った新品のジョギングシューズは履きつぶすくらい練習しなければ四十一・一九五キロは完走できないでしょう。制限時間は六時間半だそうです。間寛平のアースマラソンにくらべたらなんと「ちいせい、ちいせい」!?